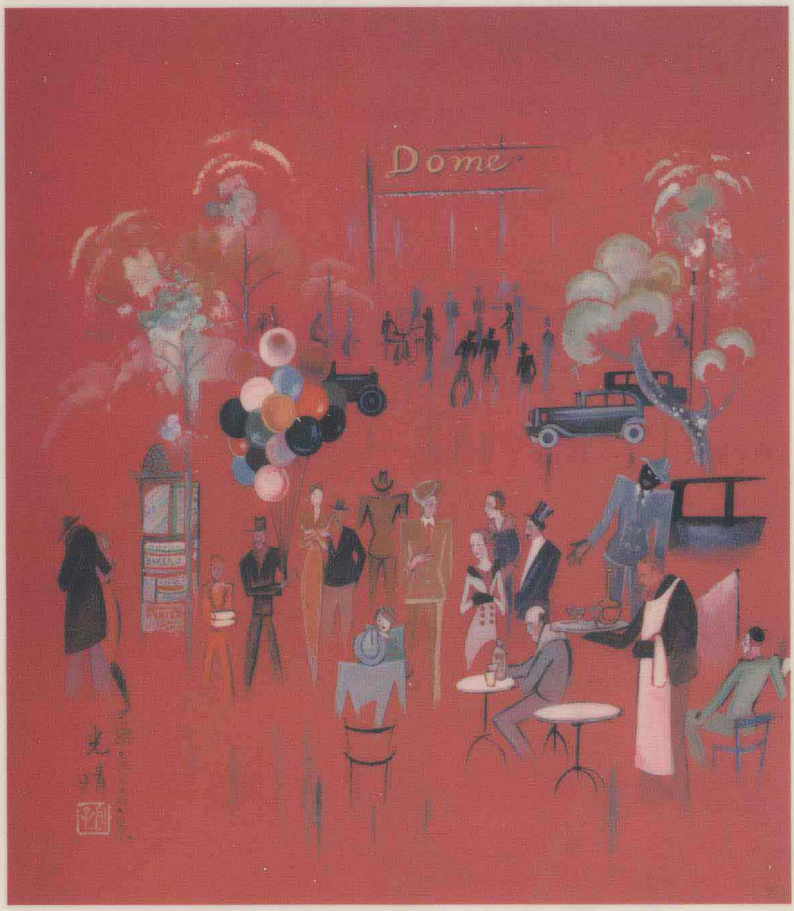
異都憧憬 日本人のパリ

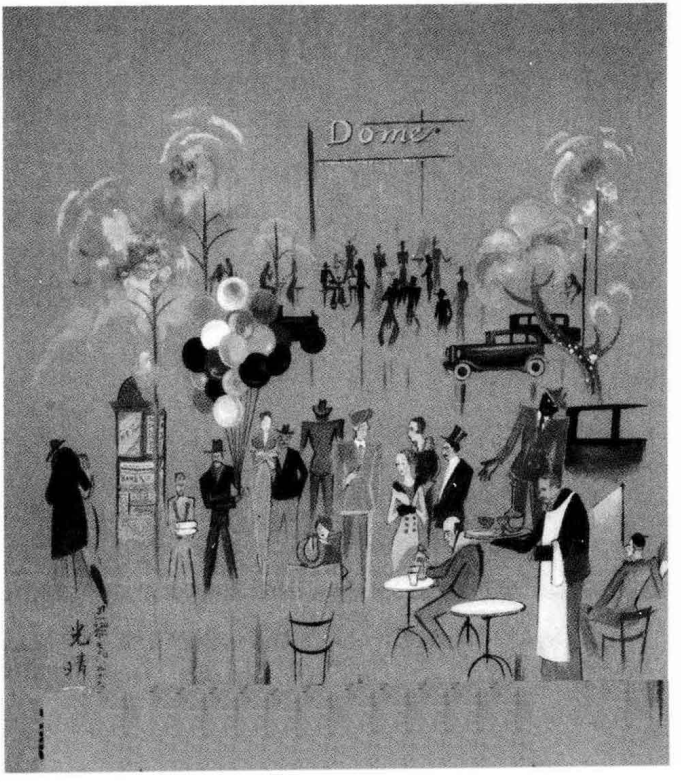
今橋映子 著



柏書房

異都憧憬 日本人のパリ

今橋映子　著



今橋　映子　いまはし　えいこ

1961年、東京生まれ。1984年学習院大学文学部フランス文学科卒業。1987年東京大学大学院比較文学比較文化専攻修士課程修了、1992年7月同博士課程修了、博士（学術）号取得。この間1989—90年パリ第四大学比較文学専攻博士課程留学、D. E. A. 取得。日本学術振興会特別研究員を経て、現在筑波大学文芸・言語学系専任講師。
論文に、「白秋のピエロ—世紀末アメリカのパリ案内小説の波及と詩的イマージュの形成」（日本比較文学会『比較文学』1992年3月）、「評伝・岩村透—明治期東京ボヘミアニズムの仕掛人」（『アステイオン』第30号、1993年10月）など。近刊の著作（共著）に、『文明としての徳川日本』（中央公論社）『ヴィジョンの比較文化—滅び・異郷』（思文閣出版）がある。

〔ポテンティア叢書29〕

書　名　異都憧憬 日本人のパリ

1993年11月10日　第1刷発行　　定価　4,800円
（本体4,660円）

著　者　今橋　映子

発行者　渡邊　周一

発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1－13－14（〒113）
電話　03(3947)8251

印　刷　亨有堂印刷所

製　本　小高製本工業

ISBN4-7601-1017-8

目次

序章
1 幻のパリ計画—日本人のパリ・初期小史 1
2 「外国人の」パリ 16
3 本書の目的と構成 22

第I部 ボヘミアン文学のパリ

第一章 ボヘミアン生活の神話と現実 37
1 十九世紀パリ・「ボヘミアン生活」の成立 37
2 『ボヘミアン生活の情景』からオペラ『ラ・ボエーム』へ 51
3 芸術家と社会——芸術家伝説としてのボヘミアニズム 67

第二章 アカデミー・ジュリアンと文学 85
1 アカデミー・ジュリアン——外国人画学生の青春 85
2 マリー・バシュキルツェフあるいは女性画家の肖像 106

第三章　日本におけるボヘミアン文学　134
一　絵を描かぬ画家――岩村透『巴里の美術学生』新考　134
1　『巴里の美術学生』挿絵原本の発見　140
2　小説と美術家生活　147
3　明治期洋画家と社会　162
4　ボヘミアニズムの波及　176
二　ボヘミアン文学としての永井荷風――『ふらんす物語』　199
1　「おもかげ」　202
2　「再会」　209
3　「ひとり旅」　212

第Ⅱ部　憧憬のゆくえ――近代日本人作家のパリ体験

第一章　乖離の様相――高村光太郎　225
1　乖離の様相　227
2　「雨にうたるるカテドラル」再考　244
第二章　生きられる都市――島崎藤村　258
一　眼差しの変貌――『仏蘭西だより』　258
1　旅窓にて　262

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2 街上 270
3 生きられる都市 278
4 広場の発見 283
5 エトランゼエの眼 289

二 至福の時間——ピュヴィス・ド・シャヴァンヌと藤村 300
1 日本におけるピュヴィス・ド・シャヴァンヌ受容 302
2 藤村のピュヴィス・ド・シャヴァンヌ理解 307
3 旅愁の沈静 310
4 ピュヴィス・ド・シャヴァンヌとセザンヌ 319
5 絵画の領分 325

第三章 徒花の都——金子光晴 334
1 ニヒリストの目 336
2 徒花の都 341
3 パリという女 347
4 はかなき時代 352
5 「ねむれ」巴里 357

終章　貧困と街路の詩学・一九三〇年代パリ　365
——ミラー・ブラッサイ・オーウェル・光晴
1　画家光晴　365
2　ルポルタージュという手法　376
3　パリの眼　390
4　一九三〇年代へのオマージュ　402
あとがき　411
図版一覧・資料提供者一覧
関連年表
主要参考文献
索引

序章

1　幻のパリ計画—日本人のパリ・初期小史

かつて、東京をパリにしようという計画があった。

今や想像もつかないこのような都市計画は、明治なかばの〈東京市区改正計画〉のなかで浮上し、はかなく消え去っていったものである。山崎直胤（なおたね）という、現在では知る人もない内務省官吏によって提出されたこの都市計画案のなかに、私たちは、幕末から明治初年にかけて、日本人がパリに何を見、何を学んだのかを、明瞭に知ることができる。

本書を始めるにあたって、近年明らかにされたこの明治の東京計画の概要を振り返ってみたい。[1] そして幕末明治初期における日本人とパリとの出会いについて、まずは小史を試みる中から、「日本人のパリ」とは何か、その特質を明らかにしていこう。

江戸を〈東京（トウケイ）〉として首都と定めた明治政府にとって、近代国家としての外観と機能を備えた新しい都市を建設することは、緊急の課題であった。官の力によって、その計画を進める政府に浮上した二つの構想、その一つが外務省、井上馨によって推進された〈官庁集中計画〉、一方は、それと対決する形で計画され、結局は生き残ることとなった内務省の〈東京市区改正計画〉である。

井上馨は、周知の通り、条約改正を推進するための欧化政策の一環として、すでに明治十六年(一八八三)に鹿鳴館を完成させていた。その勢いに乗った彼は、さらに中央諸官庁の施設を、集中させることを計画する。明治十九年(一八八六)、臨時建築局が認可され、総裁となった井上馨は、エンデ、ベックマンらドイツ人建築家たちと契約を結び、早速壮麗な都市計画案を生み出していった(図版1)。軸線となる大道路が、都市のパースペクティヴを演出し、博覧会場の機能を重視、円形の大公園を抱えこんだ典型的なバロック都市計画である。〈官庁集中計画〉という、当初の目的が示すように、帝都としての体裁を、旧江戸の全てを取り払って、一挙に整えようとする、欧化主義時代にふさわしい新しい東京の姿が、そこにはあった。

「バロック都市計画」とは、建築学、都市計画史学で呼び慣わされている名称で[2]、放射状に貫く広い道路を開くことによって、ヨーロッパ中世来の「卵の殻」のごとく閉じた城壁都市を開く方法を指す。フランス第二帝政期、一八五三年より開始されたオスマンのパリ改造計画こそが、その先駆けであり、その後のヨーロッパ諸国の都市計画のモデルとされたものであった。エンデ、ベックマンもまた、新興国プロシャにあって、その影響を受け、東京の都市計画にも応用を試みたのであった。

ところが、明治二十年(一八八七)に条約改正交渉が破綻し、井上は辞任。外務省計画は、内務省に完敗する。逆に一時危機に瀕していた内務省の〈市区改正計画〉の方が再生することになるのである。

内務省の産みの親は、大久保利通であったが、彼は岩倉具視使節団に加わった欧米回覧の経験から、日本の近代化は、西洋の「国体政俗」の移植ではなく、「殖産興業」であることを痛感する。したがって内務省は、井上の方針とは全く逆に、都市を市区改正という視点からとらえ、江戸以来の歴史のなかで形成されてきた街の仕組みと、東京の現状をどう修正していくかということに焦点をしぼっていった。その結果、官庁集中などの「体裁」は放棄されて、上下水道、道路、鉄道、中央市場、丸ノ内地域払い下げといった改正点が実行に移された。ただしこの計画は、修正改革であっただけに、また莫大な経費を必要としたという問題も抱えただけに、遅々たる歩みでしか進められず、全

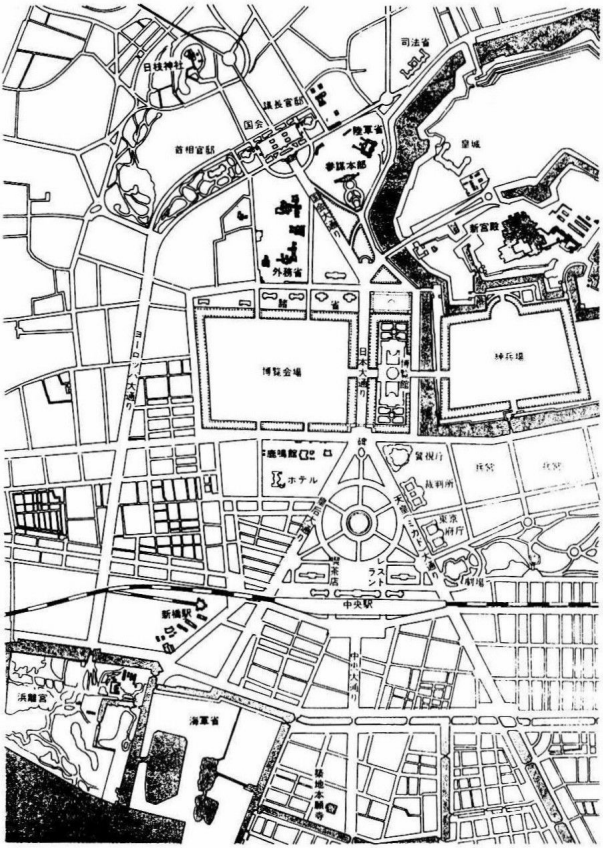


図1　「官庁集中計画ベックマン案」 1886年6月立案

ての計画が実現されたのは、実に大正三年(一九一四)のことであった。

ところが、こうした都市改良事業からは想像もつかないが、「殖産興業」を旨とした内務省の官吏たちでさえ、当初は、井上馨同様の「純粋移植」の都市構想を抱いたことがあったのである。明治の都市計画はプロジェクト型で、一つの具体的な都市像による街づくりであるといわれるが[3]、まさに明治期東京の理想像として、パリの姿が見え隠れしている。藤森照信氏は特に名づけられていないが、私たちとしては、〈パリ計画〉としか呼びようのない帝都化構想を、明治十八年(一八八五)二月十日〜十月八日まで設置された「市区改正審査会」の貴重な記録である『東京市区改正品海築港審査議事筆記[4]』のなかに、読むことができる。

市区改正審査会は、明治十七年(一八八四)に、東京府知事芳川顕正によって本格的にまとめられた「市区改正意見書」をたたき台に、展開された。内務省関係者に加え、渋沢栄一、益田孝ら財界関係者で構成された諮問委員会である。諮問という性格上、結局彼らの議論は、芳川案の項目ごとの是非が中心となっていくのだが、数日間に及ぶ会議の冒頭では、むしろ理想高く、道路改正中心の芳川案に対する根本的疑問が呈示され、山崎直胤による帝都論、渋沢栄一による築港商都論が、積極的に開陳された。詳細は藤森氏の論に譲りたいが[5]、そこで問題となっていたのは、つまり、東京を帝都として考えるのか、あるいは商都として考えるのか——という未来の首都の運命を占う重大な点であった。そして周知の通り、東京は商都としての機能を第一に、現在もまだ拡大され続けているわけである。その選択の分かれ道となった明治十八年の段階で、帝都のモデルとされた都市、それがパリであった。

その〈パリ計画〉の提案者である山崎直胤(一八五二—一九一八)は、当時内務大書記官であったが、彼自身明治五年(一八七二)、十八歳の若さで、工部留学生として産業技術調査のために渡仏し、三年あまりの留学生活を送った。その後明治十五〜十六年にかけても伊藤博文の欧州憲政視察団に加わって再度渡欧しているエリートである。彼は明治十四年に創立された仏文会、および同組織が改組(明治十九年)された仏学会でも活躍していて、いわば知仏、親仏派の人物であったらしい[6]。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

山崎は、先の市区改正審査会(明治十八年二月二十日)にあたり、周到な原稿を用意し、パリのオスマン計画の概説のために、『チュクドレー近世仏国第三世ナポレオン帝紀』[7]の一節を、翻訳してくるほどの意気込みであった。

そして「我東京ハ全国ノ帝都ニシテ政府ノ座所ナリ」という帝都論の提案から演説を始め、「私モ巴里ノ実地ヲ目撃シ亦欧州ノ史ヲモ閲シ其立派ナル所以ヲ覓ルニ偶々歴史中其事ニ就キ掲ケアルモノアリ之ヲ一読ナシタル時ニ嗚呼東京モ斯クコソアリタケレトノ感想ヲ惹キ起セリ」[8]と熱弁をふるう。フランスで、十八歳から二十一歳までの青春を送ったという彼個人の思い出が、大きく影響しているのは疑いようもない。が、それにしても、内務省官吏という立場の人間が、これほど壮大な、夢のような計画を提案できるというところに、明治の都市計画が、「像」をもとにしたプロジェクト型であったことを、改めて知らされるのである。

日本人として初めてパリに赴いたのは、幕末、文久二年(一八六二)第二回竹内保徳遣欧使節団一行である。それ以来現在まで、百三十年間、パリは遠い異国の都として、私たち日本人とさまざまに関わってきた。その第一期として位置付けられるのが、竹内使節団以降、緊密な日仏関係を背景とした四回にも及ぶ幕府使節団と、明治五〜六年(一八七二—七三)に滞在した岩倉具視使節団である。[9]彼らが残した記録、公文書等については、政治、技術、文化、科学などの諸分野ですでに詳細な研究が数多く出されている。また特に文久二年使節団の人々が、日本人として初めて、いかにパリという都市を見聞したかについては、芳賀徹氏の『大君の使節』[10]で、生き生きと記述されている。

今、私たちが山崎直胤のテクストを再読して改めて気づくのは、彼自身を含め、これらの第一期の官僚たちが次々と渡仏した一八六二〜一八七三年の十年間のパリは、第二帝政末期、オスマンの都市改造計画が完成し、パリが名実ともに近代都市に生まれ変わる時期に、ちょうどあたっていたということである。山崎に限らず、竹内使節団以来の官僚たちの使命は、何よりも、先進文明の機構や施設の摂取にあったから、西欧の「麗都」(久米邦武)パリは、驚異と讃嘆の的であった。

一八五一年、クーデターに成功して帝位についた(十二月二日)ナポレオン三世は、そのわずか十日後に、自ら都市改正案の大綱を公に示している。ロンドン亡命時代に、産業社会の台頭を肌で感じたナポレオン三世は、政権を執るや否や、鉄道と道路網の整備による近代的都市として、パリを再生させることに全力を傾ける。それを見事なまでに実現させたのが、一八五三年にセーヌ県知事となったジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン男爵(一八〇九―一八九一)であった。[11]

その大都市計画を総括してみると、第一に、ルーブル宮――パリ市庁舎を貫く横軸の幹線道路(リヴォリ通りの開通を含む)に、セバストポール通りからサン・ミシェル通りへと連続する縦軸の大通り(ブールヴァール)を交差させることで、パリの歴史的な中心点に、一大十字路を建設。その他市内の重要地点を相互に結ぶ通りを幾本も通すことによって、過密化し、貧困化した旧市街を取り壊し、都市に空気を入れる。またノートル・ダム聖堂、凱旋門のような記念建築物を、オープン・スペースに孤立させ、モニュメントとしての意味を強める。街路を舗装し、一定間隔で植樹をする。ブーローニュの森、ビュット・ショーモン公園その他を改修し、市内各所にスクウェアも設ける。

一方では、中央市場やシテ島の公共機関などを集中化し、水道、ガスなどの諸機能を整備する。さらにはオペラ座新築を企て、この完成(一八七四)は第三共和政まで、もち越されたのである。このような徹底した改造計画は、都市全体を俯瞰的視点から構造化し、地上においては遠近法に基づいた壮麗な眺めを演出しようという、ナポレオン三世の権力の具現化そのものであったとも言える。その上、広い直線道路は、単なる美観の演出でなく、従来のようなバリケード戦を不可能とするため、との政治的目的も、早くから指摘されていた。

いずれにせよこの改革が、ルイ・フィリップ時代から台頭してきたブルジョワ階級の、都市生活に対する要求と合致したからこそ、促進されたことは言うまでもない。[12] 大通りに面した新しいアパルトマン、その下階を占める一流商店、デパート、オペラハウス、レストラン、ブーローニュの森での休日――という、現在まで続いている典型的な都市生活の形態は、この時代の産物である。

だが一方では、パリ中央地区での急激な地価高騰のために、市外へと人口は流出し、[13] 旧市街の取り壊しによって失われた古いパリの姿は、詩人や画家に、逆に深い啓示を与えることとなる。[14] ゾラ、マクシム・デュ・カン、シャルル・メリヨンなどから、ルイ・アラゴンに至るまで、枚挙にいとまがないが、特に知られているのがボードレールのこの一節だろう。

パリは変る！　だが私の愁（メランコリー）いの中では、何ものも
動きはしなかった！　新しい宮殿、組まれた足場、石材、
古い場末の町々、すべてが私にとっては寓（アレゴリー）意となり、
私のなつかしい思い出の数々は、岩よりも重い。

（ボードレール「白鳥」『悪の華』所収、[15] 阿部良雄訳）

だが、オスマン着任（一八五三）以来、第一期工事がちょうど終了した一八六二年に、初めてパリを見聞した幕末使節団にとっては、この都市は、圧倒的な繁栄と美とを誇っていた。竹内使節団の記録にはまだ出てこないが、オスマン都市計画については、山崎直胤よりすでに前に、栗本鋤雲『暁窓追録』（明治二年）に、その記述がある。

市尹「ホースマン」ナル人会社ヲ結ヒ、巴里ノ街衢紆余曲折スル者ヲ改メ直達ニ造リ、（……）人家ノ往来ニ妨ケアル者ハ、皆購ヒ毀テ、道路ヲ改造ス。其意満都ノ道路ヲシテ不レ残「フルバール」ト名ケ、樹木ヲ列栽セル大路ト成サント期セリ。現ニ今数十箇所ノ造築ニ取リ掛リ、新築美麗ノ家屋モ不レ見二纔旬日一ノ間ニ忽チ片礎モ不レ存ニ至ルアリ。草蕪ノ棄地俄然ニ雲聳七層楼ヲ現スルアリ。[16]（句読点引用者）

栗本鋤雲は、幕府瓦解の時もヨーロッパにあって、日仏交渉の難局の打開に奔走した幕臣である。『暁窓追録』は、ナポレオン・コードの概説に始まり、裁判、警察制度、軍制、貨幣から、食物に至るまで、異国の近代国家のシステムに圧倒されることなく、正確に把握しようとする気概に満ちた記録である。鋤雲は、パリ都市改造計画の全てに通じていたわけではないが、引用にあるように、実際に多くの建物が突如破壊されたり、また逆に聳え立ったりする現実を見た驚きを記している。しかも同時に、この都市計画の財源を語り、さらにこうした公共事業が「民の命を養い」、治国につながることを、旧幕臣という立場から注目しているのである。そしてパリという都市を、歴史、政治、社会、産業、文化のあらゆる面から把握し、「領略し」、記述しようとする姿勢は、明治五年(一八七二)末より約二ヶ月間滞在した明治新政府の使節団、岩倉具視一行の記録――久米邦武『米欧回覧実記』(明治十一年刊)にも、引き継がれている。その上、豊富な漢語の語彙と、明晰な漢文体の文章構造に支えられ、異国の景物は誇張も虚飾もなく、驚くべきほど正確に、しかもどっしりとした美しさをもって記述されている。

> 馬車ニテ巴黎ノ市街ヲ走ル、嗃嗃(こうこう)タル層閣、街ヲ挾ミテ聳ヘ、路ミナ石ヲ甃(しゅう)シ、樹ヲウエ、気燈ヲ点ス、月輪正ニ上リ、名都ノ風景、自ラ人目ヲ麗(クルハ)シ、店店ニ綺羅ヲ陳(つら)ネ、旗亭ニ遊客ノ群ル。(17)(久米邦武)

山崎直胤の〈パリ計画〉の背後には、実に二十年以上に及ぶ、これら官僚たちの近代都市観察の歴史があった。ただし明治維新以降、特に旧幕府側の記録の多くは埋もれ、公刊され広く読まれたのは、福沢諭吉『西洋事情』(慶応二年刊)や、久米邦武『米欧回覧実記』など、ごく一部にすぎない。山崎は、むしろ自分自身の見聞と知識とによって、「あるべき」東京の姿を夢想したわけだが、パリを東京に読みかえようとする彼の意識に、往年の官僚使節たちのパリ観に通ずるものを、私たちは明らかに読みとれるのである。山崎は、明治十八年、市区改正審査会で、次のような自説を開陳する。

是ヲ以テ我改正案ニ比照シテ、二三ノ例ヲ挙クレハ、一等ノ路線ハ彼ノ「ブールバール」ニ倣フテ改築シ、浅草芝ノ公園ハ彼ノ「パルクモンソー」ノ如ク市民ノ逍遥ト為シ、上野公園モ、農商務省ヨリ東京府ニ譲リ受ケテ、彼ノ「ボァードブロンギュ」ノ如ク内外貴顕紳士ノ会園ト為シ、五層ノ尖塔両本願寺ノ堂宇、神田山王ノ社殿ハ彼ノ「サンヂャク」寺塔ノ如キ観ヲ為サシメ、水天宮金比羅社ヲ煉化石造ニ改築シテ、人民ニ開化ノ御利益ヲ与ヘ、偶像淫祠の誹謗ヲ洗滌シテ一ノ「モニュメント」ト尊重セラルヽニ至ラシメ(……)[18](句読点引用者)

山崎は、オスマン都市計画にならい、まず一等道路を並木の美しいブールヴァールにしたいと考える。そして浅草、芝をモンソー公園のような市民の公園に、一方で上野公園をブーローニュの森のような「貴顕紳士」の会園とする。この他にも、中央市場の開設、官庁街の集中、オペラ座のような劇場、グランドホテルのような本格的ホテルの建設と、彼の計画はパリをそっくり模倣したいという意気込みにあふれている。藤森氏も分析するように、山崎の〈パリ計画〉では、「新施設の必要性と、美観の強調」[19]という二つの側面が、つねに共存しているが、それこそが、幕末以来の官僚たちが「麗都」に学んだものであった。

ところが山崎の発言を、改めて読み直してみて気づく点がある。それは、彼が、寺社を「煉化石造」にして開化のモニュメントにし、「偶像淫祠の誹謗」を一掃したいと考えている点である。アメリカの都市計画家ケヴィン・リンチは、都市における空間と時間のイメージを分析した著書『時間のなかの都市』で、都市の中の過去を消し去ろうとする意志について、次のように述べている。

私たちの周囲には、過去に反抗し、過去からの解放を企てている人びとがいる。彼らは、時間の中に根をはって生活している人びととも、時間の根をもたずに生活している人びととも異なっている。過去に反抗している人びと

は、自分たちが何を捨て去ろうとしているのかをはっきりと意識している。そこでは、近い過去のシンボルが捜し出され、新しい行動の行く手を開くために破壊される。[20]（東京大学大谷研究室訳）

つまり明治十年代の東京にとって、ごく近い過去である江戸の痕跡を、オスマン流の都市計画によって消し去りたい――山崎直胤の〈パリ計画〉には、外務省の〈官庁集中計画〉同様、明治第一世代官僚の〈帝都東京〉をめざす意志が、明らかに読みとれるのである。

ところが結局、この〈パリ計画〉は、実現のしようもなかった。この日の山崎発言に対し、確かに出席者は、当初はことごとく賛同の意を表した。だが、まず第一に財源の問題がある。第二に、山崎発言に対する強力な反対者、渋沢栄一の存在が大きかった。渋沢は、幕末、徳川昭武に従って、栗本鋤雲らとともにパリに滞在し、帝都としてのパリを見聞し、十分にそれを知っていたに違いなかった。しかしそれにもかかわらず、彼は日本の現状に沿った実業家らしい計画として、築港商都論を打ち出す。そして結局はそれが、「殖産興業」の内務省の方針により近かったことは疑いようもなかったのである。そして第三には、山崎案にひそむ根本的問題――つまり近い過去の痕跡をことごとく抹殺して、ゼロの状態の上にパリという近代都市を移植しようという方法にこそ問題があった。現実に、三百年にわたる江戸の歴史を断絶すること自体、不可能なのである。

その事は、例えば第九回目の審査会の模様にも読みとれる。同年（明治十八年）四月二十一日、分科会報告として「遊園、市場、商法会議所、劇場等」の調査委員会報告が行なわれ、最後に山崎直胤によって、劇場に関する計画報告が発表された。彼は、劇場を必要とする理由として、まず井上馨の欧化政策案に類似した理由、すなわち外交上の必要性を挙げる。そして次に、日本の文学は従来「雅俗ノ別」があって、階級によって嗜好が異なるために「国民団結一致ノ勢」が乏しいと嘆く。したがって「上下ノ苦楽ヲ同フスル設備ノ一タル歌舞演劇ヲ改良」するため、欧米風の劇場が必要だと主張するのである。啓蒙のための劇場は、もちろん「洋風ニ一新」し、「石造又ハ煉化造」にすべ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com